

松久淳「羽田から恋人」 もしくは「ベンナムに恋人」

Would you like to ride in my beautiful balloon?
Would you like to glide in my beautiful balloon?

We could float among the stars together, you and I
For we can fly, we can fly

Up, up and away

My beautiful balloon, my beautiful balloon

私のすてきな気球に乗りたくない？

ファイフイス・ディメンションの歌声に合わせて、ともに青い尾翼のエールフランスのエアバス300と、数年前に英國海外航空から名称を変えたブリティッシュ・エアウェイズのボーイング707が、ゆっくりと近づいてきて、鼻先でキスをするかのようにぴたりと止まる。すぐに整備員たちがタラップを設置すると、バレンシアガがデザインしたパール・ピンクのサマースーツ姿のフランス人スチュワーデスたちと、青と白のスカーフを首にあしらつた、同じくピンクのミニワンピース姿のイギリス人スチュワーデスたちが、タラップの階段をリズミカルに踊りながら降りてくる。

すでに滑走路で華麗に足を上げて踊っているのは、外出用の真っ赤なトレーナーを着たコンチネンタル航空のスチュワーデスたちと、オレンジ地に縦の大きな白のラインが入った、トラペーズラインのミニワンピースで、同じオレンジ色の帽子を誇らしげに掲げているユナイテッド航空のスチュワーデスたちだ。

彼女たちの間を縫うように、羽田の整備員たちと各国のパイロットたちが、交差しながら抜けてゆく。

向こうではノースウェスト航空機とスイス航空機が、ともに赤い尾翼ですれ違いつつ、それぞれ反対方向へと離陸していく。その後には、オレンジ色が斜めにあしらわれたカナダ太平洋航空のマクドネル・ダグラスDC-10と、濃紺の窓部分のラインの上は鮮やかな水色のKL Mオランダ航空のダグラスDC-8が滑走路をくるくると旋回している。

コンテナを下ろしたタグ車が走り込んでくる。その上でエキゾチックなダンスをしているのは、紫色のジャケットと長い麻のスカート姿の、ガルーダインドネシアのスチュワーデスたちと、民族衣装のサロ

ンケベヤを纏つたマレーシアーンガポール航空のスチュワーデスたちだ。

赤い尾翼に白のカンガルーのシルエットのカンタス航空機と、青い尾翼に黄色の丸のルフトハンザ航空機が並んでやつてきて、ぴたりと止まる。同時にタラップ車が横づけされた。そこから花柄のロングスカートに、襟のぐつと開いた緑の長袖ブラウス姿のオーストラリア人スチュワーデスたちと、尾翼同様青と黄色の二種類のミニワンピース姿のドイツ人スチュワーデスたちが、くるくると舞いながら降りてくる。

各国のスチュワーデスたちと、それを取り囲むように整備員やパイロット、そしてグラウンドホステスたちが壯觀なダンスを見せる中、青空の向こうからひときわ存在感を見せる機体が滑走路に着陸していく。パンナムのボーイング747だ。地球を模した青の円形の中の、PANAMのロゴはいつ見ても誇らしげだ。

取り付けられた左右6か所のタラップから、青のスーツと帽子、白のブラウスと手袋のおなじみの姿のスチュワーデスたちが、一斉に滑走路へと躍り出る。彼女たちはすばやくターンしながら、三つのグループに分かれ、各国のスチュワーデスたちの輪に混ざりっこく。そして全員が見事に回じダンスを披露し始める。

だって私たちは飛べるんだものー。 嘘くそー

The world's a nicer place in my beautiful balloon
It wears a nicer face in my beautiful balloon
We can sing a song and sail along the silver sky
For we can fly, we can fly

Up, up and away

My beautiful balloon, my beautiful balloon

小巻は、畠田寛治の展覧会に並んでいた。

実際はまだ朝が早いせいか日航機とノナイティシビ機とハナム機しか駐機していない。しかし「Up, up and away」を口ずやみながら、ターミナルやエプロン、滑走路などを見ていると、各国の飛行機やスチュワーデスたちが、カラフルに踊る様をいつも夢想してしまつ。

1976年12月11日。安東小巻（あんどうのまき）は20歳の誕生日を迎えた。

今日は大事な仕事の日もあるが、そんな日だからこそ、早起きをして羽田空港にやつてきた。

羽田空港の展望デッキは、小巻がもつと愛する場所だ。今日のように誕生日などの記念日、大事な用事がある日だけでなく、嬉しいことがあつたときも、逆に気分が落ち込んでいるときでも、時間があれば赤坂の自宅マンションを出て、浜松町からモノレールに乗る。

ターミナルデッキではなく、出発ロビー左端から階段を上がりつて外に出る見学デッキのほうが、様々な飛行機やスチュワーデスたちを見られるので、小巻はとくに好きだった。

12月の風が冷たい。

小巻は真っ赤なカーディガンとチャコールグレーの膝上のペンシルスカートの上に着た、英國調の赤のタータンチェックの少し大きめなコートのポケットに手を入れて、体をきゅっと縮こませた。

羽田空港はますます増加する便数と、ボーイング747など大型化する機体のためにパンク寸前で、再来年には国際線のほとんどが、千葉県の成田に開業する新空港に移つてしまふ。小巻はそのニュースに、溜息が出るほど落胆した。私の好きな羽田空港が、世界中の人々が集まつて、人々が世界中に旅立つていく羽田空港が、まさかその姿を変えてしまうなんて。

そのとき、そんな寂しい気持ちを振り払うかのように、小巻は思わず「わあ」と小さな歓声をあげた。

搭乗が終わつたパンナムのボーイング747が、ボーイングカーに押されてゆつくりと後ろへと動き出したのだ。

やがて所定位置に着くと、トeingカート整備員たちは離れ、機体は自ら前へ進み始めた。左へ一度、さらに左へ一度、ずっとまつすぐに進んでから、右へ一度、さらに右へもう一度旋回と、長い時間をかけて滑走路のスタート地点へとたどり着いた。

管制からの指示が出たのだろう。走り出した機体は一気にスピードを上げた。

あの飛行機はどこへ行くのだろう。ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴ、それともハワイ。小巻はそんなことを想像しただけで、なんとも言えない幸せな気分を味わう。

パンナムのロゴが、右斜め上に傾いた。重そうな機体は、先端を上へ向け、徐々に滑走路から離れていった。そしてキーンという高音と、

「一」という重低音を空港中に轟かせて、羽田沖へと飛び立つていった。

小巻は、その尾翼が青空の中に完全に吸い込まれていくまで、いつまでも見つめていた。

そして「よし」と小さく呟いた。今田は、いよいよひとつの夢が実現する日。そのために、何日も何日も一人で練習もしてきた。小巻は大きく息を吐いて、心中で「がんばらなくちゃ」と自分に言い聞かせた。

そして「Up, up and away」を口笛で吹きながら、颯爽とモノハーネル乗り場へ向かった。

Suspended under a twilight canopy

We'll search the clouds for a star to guide us
If by some chance you find yourself loving me
We'll find a cloud to hide us, keep the moon beside us

どんな夢を見ていたのか田が覚めた瞬間に消れてしまった。ただ、やけにカラフルで楽しげな夢だった。そして、その中で「Up, up and away」が流れていた気がする。

いや、そうじゃない。

松崎公生（まつやまきみお）は寝返りを打つて、反対のほうへ耳を向けた。夢ではなく部屋には実際に、小さな音で「Up, up and away」が流れていた。

昨夜、いつものように「ジエットストリーム」をボリューム1で流しながら眠った。オープニングナレーションの「遠い地平線が消えて、深々とした夜の闇に心を休めるとき、はるか雲海の上を音もなく流れ去る気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています」という城達也の名調子から、いつもだいたい3曲目には眠りに落ちてしまう。

ファイフス・ディメンションはつけっぱなしのFM東京の朝の番組の選曲だった。何のCMソングだったんだろうか。確かトランス・ワールド航空だったと思うが、記憶は定かではない。そもそもそのCMは日本でも放送されていたのだつたろうか。

起き上がり、田立ロー・ディーのステレオに手をかけた。イジェクトボタンを押して、セルジオ・メンデスのLPレコードをダビングした、マクセルのカセットテープを取り出す。A面の最後で終わつたままなので、B面にひっくり返して再生ボタンを押そうとしたが、そこでラジオの曲が「Up, up and away」から、流麗なストリングスの前

奏に変わった。バリー・ホワイトのラブ・アンリミテッド・オーケストラ「愛のテーマ」だ。公生はそのままボリュームを上げた。

伸びとあくびをひとつすると、オレンジとグレイの幾何学柄のカーテンを開けた。冷氣と同時に朝の光が差し込んでくる。「愛のテーマ」をCMに使っているキャセイ・パシフィックではないのが残念だったが、タイミングよくパンナムのボーカリング747が大空へと飛び去つていくところだった。都心の各スタジオにはあまりアクセスはよくなかった。この景色のために、本羽田にアパートを借りているようなものだ。

それにしても12月の朝はさすがに寒い。

公生は今月、30歳になる。

パンナム機を見送つてから、顔を洗つて歯を磨き、ウレタンプラスチックの丸椅子に座つてインスタントコーヒーを飲んで、ハイライトに火をつけた。

壁のラックにはLPレコードや本も多いが、いちばんスペースを占めているのはアテレコの台本だ。自分の出演作品以外にもたくさんあり、同業の友人たちからは「東北新社の倉庫の次にあるんじゃないか」と笑われるくらいの冊数をコレクションしている。

ラジオがトーケ番組に変わったのでローディーのスイッチを切り、パナカラーケイントリックスのテレビをつけた。日本テレビの子供番組が映つたが、公生は小さく舌打ちをした。昨今ずっと調子が悪く、画面の下のほうに2センチほどの走査線が歪んでいたが、ついにそれがもう1本増えてしまつていた。

テレビの上部をパンパンと叩くと、一瞬だけ上の線は消えたが、またゆつくりと歪んでいった。だましだまし使つてきたが、そろそろ限界が近そうだった。

公生はこれから何本分の仕事で新しいテレビを買えるだらうかとざつと計算して溜息をついてから、部屋を出てグレイのスバル1000に乗り込んだ。ハイライトに火をつけてからアクセルを踏み込み、住宅街から第一京浜へと車を走らせた。

公生が番町のスタジオに入ると、入つてすぐ右側の待合室ではなく、次の副調整室のさらに奥の録音スペースのほうから笑い声と数人の



ざわめきが聞こえてきた。開け閉めが面倒なので、本番以外のときは防音扉に畳んだダンボールが差し込まれて、開け放しにしていることが多い。

20平米ほどの床張りの部屋の、奥の壁にテレビモニターが一台置かれていて、それに向かってスタンドマイクが3本立っている。その反対側は大きなガラス窓になっていて、その向こうはミキシングコンソールなど録音機材に埋め尽くされた副調整室だ。残った二つの壁側にはパイプ椅子が置かれていて、出番のない声優たちは各自ここに座つてスタンバイをする。

先に来ている皆は、二つのグループに分かれて世間話をしたり、台本をチエックしていたりしていた。

公生は馴染みの顔が多いほうの一角で談笑している面子をざつと見渡し、すぐそこに、初対面の若い女がいることに気づいた。噂はよく聞いていたし、なんせ台本には名前がクレジットされているのだから、それが新人声優の安東小巻だということはすぐにわかった。

しかし、人にはそんな素振りは見せないようにしているが、極度の人見知りの公生は声をかけるどころか、つい目を背けてしまった。

小巻は初めて出会う先輩声優に気づき、すぐに笑顔を作つてすつと立ち上がった。

「ハムさん、ござつす」

先に、今日の吹き替えで主人公の男の子を演じる、若手の塩田サトルが、いつものように雑な挨拶をした。

公生は公という漢字をバラして、業界内では「ハム」というあだ名で呼ばれていて、それは後輩たちにも受け継がれている。

続いて、プロデューサーの山ノ内が手を挙げ、翻訳の疋田やや子、先輩声優の三木三郎が声をかけた。長年現場がよく重なる4歳年下の清村恵美も、につこりと微笑みかけた。

「松崎さん、はじめてまして。私」

小巻は皆の挨拶が終わるのを見計らつて頭を下げようとした。公生は思つた以上に若く可愛らしい容姿の小巻に、すでに緊張していた。するとタイミングが良かつたのか悪かつたのか、そのときスピーカー越しに「ハムちゃん、よろしく」と声がした。振り向くと、ガラスの向こうの副調整室からディレクターの八重樫と、ミキサーの笹倉が同時に挨拶がわりに人差し指を振つた。

公生がそちらに指を振り返したので、小巻は自己紹介が中途半端になつてしまい、もう一度最初から始めようかと思つた。しかし、その

様子をわかりながらも照れ臭さが勝り、公生は皆に言つた。

「あれ、俺より先に奴、来てたりするの？」

「奴？」

まだ23歳だが、子役から活躍していてどんな先輩にも物怖じしない塩田が聞いた。すると恵美がおかしそうに言つた。

「すごい、ハムさんなんでわかつたの？」

公生はくんくんと鼻を動かしてみせた。皆が吸つてゐる煙草の中に、フランスのダビドフの匂いが混ざつていた。

「このくつさい煙草。こんなの吸う奴、他に誰がいるよ」

「わたくしだけよねえ、それ」

後ろから声がした。すると、何という模様と表現したらいいのかわからない、派手なレーションのシャツにパンタロンという格好の、四ツ木不二夫が腰をくねくねとさせながらやつてきた。公生のひとつ年上だが、同業者でもつとも仲が良い。

「トイレ中でもわかつちやうなんて、ハムつたらわたくしが好きすぎ」四ツ木はそう言うと、後ろから公生の腰に抱きついた。そして右腕の間にゆつと顔を突き出すと、そこにいる小巻に目をやつた。

「ハム、こまちちゃんは？」

「い、いや」

公生はそつけなく言つた。すると立つたままだつた小巻は、また頭を下げ、ようやく挨拶をすることができた。

「安東小巻です。今日はよろしくお願ひいたします」

「ああ、はい」

公生は興味のないふりを装つて頷いた。

出会うまで、公生はこの新人声優に対してあまりいい印象を持つていなかつた。外語大の女子大生で英語は堪能、入学時にその語学力とルックスを買われて、テレビの情報番組で海外ニュースを伝えるコナーのアシスタントにスカウトされた。本人は子供のころから洋画の吹き替えの声優に憧れていて、昨今この仕事も始めるようになつた。業界としても、そんなめずらしい経歴の可愛い女の子を、プツシユしていこうという気運になつてゐる。

お嬢さんの趣味でこの仕事をやられちやかなわないんだよ。まだ実際の演技を見ていない公生は、小巻の噂を聞くにつけ、そんな風に思つていたのが正直なところだつた。

こうして面と向かつてみると、なるほど、業界の先輩たちも製作陣たちも、彼女を可愛がりたくなる気持ちもわかる。きっと育ちもいい

のだろう。曇りのない愛想の良さを持っている。だが結局、大事なのは吹き替えにおける演技力とスキルだ。

「こまちやん、可愛いわよねえ」

「可愛いし、すつごいおしゃれだし」

「そんなそんな」

不二夫に続いて恵美もうんうんと頷き、小巻は恥ずかしそうに首を小さく横に振った。公生はその流れで、小巻に対する言葉を求められるのがいやで、平然を装つて話を変えた。

「ところで、なんで今日やつこさん？」

公生は不二夫をヘッドロックのように抱えたまま、疋田に聞いた。疋田はまだ35歳だがアメリカの映画やドラマの吹き替えの翻訳ではいちばんの仕事量をこなしているベテランだ。しかし今日の収録はイタリア映画で、違う翻訳家のはずだった。

「ハム、何言つてるのよ」

疋田本人や山ノ内より前に、不二夫が口を尖らせた。

「イタリア語の先生が訳した後で、台本にしたのやつこさんよ」

「ああ」

そういうことか、という意味で公生は頷いた。吹き替えはたんなる翻訳だけでなく、最終的に芝居の言葉にしなくてはならず、さらに、オリジナルの人物の口の動きに極力合わせなければならない。疋田が重宝されるのは、声優が喋りやすいリズムと文字数で台詞を作るからである。

小巻は緊張しながらも、皆のやりとりをにこにこと見ていた。公生はそんな小巻の表情と、スカートから伸びるきれいな足を、ときどき視線の端で盗み見ていた。

今日収録する「水曜洋画シアター」で放映される映画は、原題はヒロインの名前の「リリアーナ」で、5年前に『あの夏の声』という邦題で日本で公開されていた。イタリアでヒットを記録し、続編『君の声を探して』も作られていて、そちらも3年前に日本公開されていた。夏のナポリを舞台に、事情があつてこの地にやつてきたリリアーナと、彼女に憧れる地元の少年の話。少年と大人の女という設定だと、この数年でも、同じくイタリアなら『青い体験』というお色気映画が大ヒットしていたし、シリアルスものでもアメリカ映画『おもいでの夏』もあつた。

ただ、この『あの夏の声』が、とくに公生たちにとつては興味を引

く設定なのは、ストーリー 자체が「吹き替え」をテーマにしていることだった。

日本では海外の映画は、映画館では字幕で上映され、テレビ放映のときに日本語吹き替え版が放映される。しかしイタリアでは、映画館の段階で、イタリア語に吹き替えられているのが普通だ。

いつも友人たちと映画館に入り浸っているアルマンド。彼はあるところな役を演じていることに気づいていた。

そんなある日、アルマンドは街角で偶然「その声」を聞く。そこには垢抜けた大人の女性がいた。その日以来、アルマンドはその声優、リリアーナに恋い焦がれ、やがて知り合って仲を深めてゆく。

小巻は、この作品で初めての主演、リリアーナ役に抜擢された。

リリアーナの素の部分だけでなく、アメリカ映画やフランス映画の女優を吹き替える声優としてのリリアーナのシーンも演じなければならぬ。普通だつたら小巻のようなまだ脇役しか経験のない新人ではなく、達者なベテランがキヤスティングされるところだが、リリアーナ役の女優はまだ日本では知られていないイメージが定着していないから、吹き替えもフレッシュな人選をしようという意図と、小巻をスターにしていこうという局の意向が重なつての大抜擢となつた。

公生はそのリリアーナの恋人で、同じくイタリアの声優で、後にハリウッドの実写映画に抜擢されるエットーレを演じる。つまり小巻同様、エットーレが吹き替える映画の役も担当することになる。

「ではよきところで一度、通します。皆さんおののおののスタンバイで」少年役の一人、野々村広大が「お待たせしました」とスタジオに駆け込んできて全員が揃うと、副調整室から八重樫が声をかけた。吹き替えの現場を知らない人は必ず驚くのだが、リハーサルは一度しか行われない。本編を止めずに流し、声優たちは入れ替わりマイクの前に立つて演じる。それで本人も口を合わせるタイミングをつかみ、さらにな終了後にディレクターと翻訳家がチェックした点をそれぞれに伝えると、その次はすぐに本番となる。

小巻は、どうしても足が震えてしまうのを、ときどき音を立てないように足踏みをすることなんとか堪え、マイクの前に立つた。まず演じるのは、アルマンドたちが見ている映画に映る、アメリカやフランスの女優たちの声を吹き替えている、リリアーナの声だ。隣に公生

が立ち、その女優たちの相手役を吹き替えるエットーレに声をあてた。

「待つて、神父さんは私たちをかばってくれたの！」

「いいんだキャサリン。ありがとう」

「いいんだキャサリン。ありがとう」

「さて、そろそろ君たちが何を隠しているのか、教えてもらおうかな」

「慌てないで。その前に、一杯いかがかしら」

「ロマンス映画」

「もう僕は何をやつたってダメなんだよ」

「いいかげんにして！ 彼女なら海岸よ。早く行つてあげて」

小巻は自分で、どんな声がでているのかがわかつていなかつた。スタッフや他の先輩声優たちが納得するような演技ができているのかもわからない。家では何十回と繰り返し練習し、カセットテープに吹き込んで自分でも聞き返してみたりもしたが、いつたい何が正解なのかも、自分ではよくわからなかつた。

塩田演じるアルマンドと、不二夫のニーノ、野々村のエンニオの少年三人組のシーンが続くタイミングで、小巻はそつと戻つてパイプ椅子に腰かけた。誰も、良かつたよという顔も、なんてへたくそなんだという目も向けなかつた。全員がモニターに集中し、皆の芝居に集中している。さきほどあれだけふざけていた不二夫も、まるで睨みつけるかのようになにかの表情でモニターを見つめている。

ふと向かいに座つた公生を見ると、一瞬目が合つた。さつきは会話らしい会話もできないうままで終わつたが、今回もすぐに目を逸らされた。気難しい人なのかしら、いまのやりとりに、怒つてないかしらと不安になつたが、しかしいまはそれどころではなかつた。すぐに次の出番に集中するために、台本に目を落とした。

「007の新作なら、来月からだ」

映画館主役の三木三郎がつづけんどんに言い、イタリアの少年になりきつて不二夫たちが歎声をあげたり口笛を吹いたりした。

公生のほうはといえば、小巻の芝居に少し驚いていた。いまのところ、「吹き替えの吹き替え」のシーンだけなので判断が難しいというのもあるが、お世辞にも小巻は声の出し方も口の合わせ方も上手とは言えなかつた。しかし、それを補つて余りある何かを持っていることは、間違いかつた。

しかもそれは、天性の才能などという実態のはつきしりないものではなく、努力と練習の上に成り立つてゐるものだつた。そして、リリ

アナが日本語を喋るとしたら「うなんだろう」という説得力があった。

皆、若い女だからちやほやしてるだけじゃないんだなと、公生は小巻に対する自分の思い込みと誤解を少し恥じた。そして先ほどふと目が合つてしまい、そのまますぐな視線に照れていた。

「いまさらそんなこと言つたつて」

「お願いだリリアーナ。どんなことをしてでも償う。だから僕と一緒にローマに戻つてくれ」

物語は終盤にさしかかっていた。公生はモニターの中で、小巻を抱きしめて必死に愛の言葉を囁いていた。やはり間違いない。小巻には人の心にきちんと届く「声」がある。そう思うと同時に、公生は惜しい気持ちが強くなつていった。その「声」があるからこそ、テクニックの稚拙さが目立つてしまう。

「私がもつと私がもつと若かつたら、君に恋をしたと思う」「僕はもつと大人になつて、あなたと恋をしたいです」

「そのころ私、もうおばあちゃんよ」

映画のラスト、リリアーナは自分に恋をしてくれた少年アルマンドに、そう言つて微笑みかけた。

モニターがふつんと消え、スタジオ中の誰も大きく息を吐いて緊張を解いていった。しばらく誰も何も言わずに、小巻は不安に押しつぶされそうだった。やがて、不二夫が一際甲高い声で言った。

「こまちやん、良かつたじやない、リリアーナちゃん可憐だつたわ」そして台本を手に持つたまま、しなを作つて顔の前でパチパチと拍手をした。

「私、新人のときにこんな度胸なかつたなあ」

「映画どおり、こまちやんの声、ずっと聞いてたかつたねえ」

恵美が関心したように頷き、塩田が馴れ馴れしく小巻の右肩をとんとんと叩いた。小巻はふーっと大きく息を吐いてからにつこり笑つた。「ありがとうございます。至らないところもいっぱいあつたと思いましたが」

「タイミング合わなかつたところ、ちよつとあつたわね」

疋田が注意点を書き込んでいた台本を、鉛筆でこつこつと叩いた。

「はい、申し訳ありません」

「でも確認したら大丈夫なくらいよ。ね？」

疋田は窓ガラスのほうに顔を向けた。

「やつこさんのチェックだけで、こつちはオッケー」

八重樫がスピーカー越しに言った。

「なんかお顔が可愛くて声まで良くてで憎つたらしいけど、初主演は合格点ね。ねえ、ハム」

不二夫が、黙つたままの公生に声をかけた。公生も、皆と同じように思つていたが、小巻の顔を見た瞬間、なぜか若い女をちやほやする男だと思われたくないという、ひねくれたスイッチが入つてしまつた。「やつこさん、ドレスのズレ、パクつちやつたところ、ちょっとじゃないですよね」

公生のその言葉に、スタジオの空気が少し変わつた。台詞を早く言い終わつてしまい、元の俳優の口が無音で動いていることを、パクパクすることからパクると呼ぶ。確かに緊張のためか少し早口になつてしまつたところがあつたことは、小巻自身も自覚していた。

「申し訳ありませんでした」

小巻が頭を下げる、不二夫がすかさず口を尖らせた。

「ハム、細かいわよ。あんただつて、本番でなんとかなるくらいのズレだつて、隣で聞いてたんだからわかるでしょう」

そのとおりだつた。それどころか、たぶん不二夫よりも小巻の才能に驚いていたとすら思つている。しかし、公生はこういうときの引き際が不得手だつた。

「不二夫もみんなも、甘くない？ 主演だよ。なんとかなるくらいで、本番いっちやましいでしょ」

へらへらと笑つて足を投げ出して座つていた塩田が、なんだかまずそうだという顔でそつと姿勢を直し、アルマンドの母親役の宮田みどりが三木の肘をそつと突いた。公生が若手、とくに女に対してはときどき、何がきつかけなのか怒り出すことがあることは、長いつきあいの連中は皆知つていた。

しかしその根本に、公生が極度の人見知りで初対面の相手はとにかく照れ臭く、そして人見知りだからこそ、その怒りを本人にぶつけずにまわりにあたることは、まだ誰も気づいていない。

「ハム」

不二夫がたしなめるような口調で言つたが、公生は今度は副調整室のほうに言つた。

「八重樫さん、ちゃんとやんないと、逆に彼女の評価下がつちやいますよ」

小巻はきゅつと唇を噛んだ。鼻先が少しつんとしてきたが、涙はこ

ぼさないよう必死に耐えた。そして振り絞るように言つた。

「休憩の間に、ご迷惑おかけしないよう、きちんと全部さらつておきます」

小巻の震える声に、いちばん狼狽したのは公生だったが、その顔を見てしまわぬように副調整室のほうへ顔を向けたままにした。

だいたい収録は、午前中にいまのよう通じで行い、チェックと打ち合わせ、昼食を挟んで、2時間後に本番が始まる。

「ハム、そこまで言うなら、お昼、こまちやんにつきあつて相手してあげなさいよ」

不二夫が場を收めるように、しようがないわねという口調になつて言つた。すると小巻は、まつすぐに公生を見てから、深々と頭を下げた。

「よろしければ、お願ひいたします」

公生は一瞬で、なぜ若手に説教のような物言いをしてしまつたかを後悔し、そしてこれから小巻と2人きりで膝を付き合わせるかもれないことに照れ、続いてその現場を回避するための、もつともらしい理由を考えた。そして視線を小巻に合わせず、塩田のほうへ向けた。「リリアーナは塩ちゃんとのシーンが多いんだ。塩、つきあつてやんな

「俺つすか？　いや、かまわないのでよ、というか、いいですよ。じやあこまちやん、ランチ、僕とね」

「はい」

小巻はさつそくにやつき始めた塩田にこくりと頷いた。公生はいま、嫉妬の感情が湧き上がりそうな予感がしている自分に驚いていた。

「レディに優しくないなあ、ハムちゃん」

するとスタジオのドアが開いて、そんな声がした。振り返るまでもなく、その飄々としているながら上品な美声は、大先輩の大村正明のものだった。アスコットタイにツイードの上等なジャケット、手にはハイブというお決まりの格好での登場だった。

「正明さん、おはようございます」

公生に続いて、スタジオの全員が立ち上がつて挨拶をした。

大村は吹き替えではおもにイギリスの紳士役などを多く担当しているが、ナレーターとしても超売れっ子で、テレビをつけていると1時間番組中に3社のCMから声が聞こえてくることもある。『あの夏の声』に出番はないが、水曜洋画シアターの予告CMは全作品、大村が担当していて、1か月に1度、4本分のナレーションを、本編収録

の昼休み中に、こうして収録に来ている。

「サブでちょっと聞いてたけど、そちらのお嬢さん、若いわりにはお上手なほうでしょう」

「は、はい」

20歳年上なだけではなく、同業の先輩としての尊敬にくわえ、単純に好きな声の5本指に入る大村にたしなめられると、公生は素直に頷くしかない。若手に戻つたかのような公生の姿に、不二夫が口の動きだけで「いい気味」と笑つた。

「お嬢さんも、ハムちゃん、期待してるからこそその苦言だと思つて、受け止めてくださいね。でもあんまり細かいところを気にして、本番で声が縮こまつてしまうと、もつたいたいですよ」

「ありがとうございます」

小巻は笑顔になつて、大村に頭を下げた。そしてすぐに、その笑みが公生に対し失礼になつたかも知れないと思い、公生にももう一度頭を下げた。

公生はそこでようやく、そつと「すまなかつた」という顔を小巻に向けた。小巻はその思わぬ公生の仕草に、嬉しくなつて両手をきゅつと握つた。

大村のナレーション録りのために、全員が昼休憩がてらスタジオを出た後で、残つていた公生は大村に言つた。

「正明さん、聞かせていただきてもいいですか

「私の声なんかでよければ、お好きに」

大村は肩をすくめた。最後にスタジオを出るときに、そのやりとりが聞こえた小巻は、思わず振り返つた。

「あの、もしある邪魔でなければ、私もよろしいでしようか」

「お邪魔どころか、お嬢さんのような方に聞いてもらえるなら、いつもより頑張らなくちゃいけないねえ」

大村はパイプを掲げるよにして、小巻に微笑みかけた。小巻は、これから本番まで必死に台本をチェックしなくてはならないのに、大村の声を間近で聞くチャンスを逃したくないという気持ちだつた。しかし、そう言つてしまつた後で、公生に「そんな暇があつたら練習しろ」と怒られてしまうかと不安になつたが、公生は無言で「勉強になるよ」という顔つきで頷いた。

大村は4本分の映画の、水曜洋画シアターでの次週予告と、他番組中のスポット予告の15秒ずつ計8本を、一度のリテイクもなく、ぴつたりと秒数も合わせて一気に読み上げていつた。公生はこういう

特別な声に素直に憧れる。自分がどれだけ巧くなつても手に入れられない、たつた一言で空気を作れる声。

そして、大村とはまつたくタイプもキヤリアも違うが、小巻はそれを持つている。

大村はさらつと、しかし味わい深い声で、これから公生と小巻が収録する映画を語つた。

彼女の名前はリリアーナ。少年は、彼女に、彼女の声に、彼女の映画に、恋をしました。夏のナポリ、いつまでも忘れられない、あのひとの唇。水曜洋画シアター『あの夏の声』。次週、映画のひとときをお楽しみに。



日曜日の昼すぎの銀座は、銀座通りの歩行者天国に青と赤と黄色の大きなパラソルがずらりと一列に並び、家族連れからカップルまで、まっすぐに歩けないくらいの人出だつた。とくに三越のマクドナルド前の行列は、レジにたどり着くのに何分かかるのだろうというくらいだつた。

駐車場は混むので、公生は京急と山手線で有楽町までやつてきた。映画の上映まで70分という中途半端に時間ができてしまつたので、日劇であらかじめチケットを買ってから、銀ぶらでもするかと四丁目交差点のほうへやつてきた。

そのとき、行き交うすべての人が、動きと色を失くした。公生には、そう見えた。

人混みの中で、小巻が公生に気づいて大きく手を振つて、小走りにかけてきた。大きなメタルボタンとバックリのついたハイウェストのトレーナーに、青と白のリボンをあしらつた濃紺のキャペリンをかぶつている。公生にとつて、雑然とした銀座はその華やかな姿の背景にすぎなくなつた。

「松崎さん」

小巻は弾むような声と人懐こい笑顔で、公生の胸に飛び込むくらいの勢いでやつてきた。公生はその嬉しそうな唇の形と、そこから覗く白い歯に見とれた。

「安東、くん」

言つたそばから、いちばんつまらない返事をしてしまつたと公生は後悔した。しかし小巻は、息を感じるほどの距離で公生に自分の苗字を呼んでもらえたことに、少女のようにはじいていた、

「すごい偶然！ お仕事ですか。お買い物ですか」

「いや、この後、映画に」

近くを行き交う男がときどき、帽子のつばの先の小巻の顔を覗き込んでいるのがわかつた。服装もだが、確かに小巻の可愛らしい容姿は人目を引く。

「私もです。何をご覧になるんですか」

小巻は、期待を込めて聞いた。

「そこの日劇で」

「一緒です！ 『がんばれ！ ベアーズ』ですよね」

小巻は体を揺らして子供のようにはしゃいだ。

「うん。え、安東くんも？」

「そうなんです。松崎さん、どなたかとご一緒ですか？」

小巻はオフホワイトのテリーヌバッグのバッグから、前売り券を公生に見せながら訊いた。

「いや、一人だけ」

「じゃあ、お邪魔でなければ、ご一緒させていただけませんか」

「それは、いいけど、君は？」

公生はこれから小巻と隣同士に座るのかと少し緊張しつつも、小巻

のような女の子が、日曜日に一人でいることが少し不思議になつた。小巻はその公生のニュアンスを察して微笑んだ。

「夜、お友達と会うんですけど、映画はいつも、半分お勉強みたいな気持ちで一人で来るんです。でも松崎さんいてくださると、先生と一緒にみたい」

「先生？」

「ごめんなさい。終わつたら、映画のこととかお芝居のこととか、そのまま伺えるかなつて、勝手に想像してしまつてました。松崎さん、お忙しいですね」

小巻はぺこりと頭を下げた。

「いや、僕は今日、何もないけど」

「じゃあお願ひします。映画の後、私も2時間くらい空いちやうんです。つきあいしてください」

「でも、教えてあげられることなんか」

何もないよと公生が言いかけると、小巻はすぐに首を振つた。

「松崎さんと映画のお話ができるだけで、私にはすごい勉強ですよ」すっかり小巻のペースだつた。しかし、公生にはなぜかそれが心地良かつた。

昨日の『あの夏の声』の収録は結果、小巻は完璧だつた。公生たちなら気になる台詞のタイミング違いが少しだけあつたが、収録が終わると、スタッフとキャストたちから同時に拍手が起つた。誰もが、主演級を演じられる新人声優の誕生を心から祝つた。公生も、リハーサルでの態度の手前、表情は変えなかつたが、その拍手につきあつた。まわりには渋々に思えたかもしれないが、いちばん小巻の声にすっかり惚れ込んでいたのは、間違いなく公生だつた。

大酒飲みのウォルター・マツソーが弱小の少年野球チームを勝利に導く話は、ファミリー向けの印象だつたが思つた以上に、映画に関する仕事をしている公生にも響くような映画だつた。小巻も、ラストシーンはお約束の展開だつたがそれでも、思わず歓声をあげたくなつていた。

エンドロールが終わつて立ち上がると、公生はなぜか左腕が痺れるような感じがした。しばらくして、それが左隣の小巻にずっと緊張していたせいだと気づいた。

劇場の外に出ると、夕暮れが近づいていて、数寄屋橋交差点の不二家のペコちゃんの巨大な電飾と、その向こうに大きな地球儀の形にきらめく森永キヤラメルの電飾がともに、すでに灯つていた。

とくにあてもなく歩きながら、ひとしきり映画自体の感想を言い合つたりした後で、小巻は公生に「もし吹き替えになるとしたら、誰が演じると思いますか」と尋ねた。そこで公生も、ウォルター・マツソーはこれまでファイックスがないなど気づいた。

スター級の俳優には日本の声優もだいたい決まつてゐることが多く、それをファイックスと呼ぶ。オードリー・ヘプバーンなら池田昌子、グレゴリー・ペックなら城達也、クリント・イーストウッドなら山田康雄、シャーリー・マクレーンなら小原乃梨子、といった具合に。しかしウォルター・マツソーとなると、映画でコンビを組むことが多いジヤック・レモンなら愛川欽也でファイックスだが、マツソーは作品によつて声優がばらばらだつた。

公生はしばらく、そんなファイックスのある俳優とない俳優の実例などを出して小巻に語つた。小巻は本当に熱心な生徒のように、そんな話を目を輝かせて聞いていた。公生は喋りながら、きつと小巻はこれ

から何人の若手女優のファイスクスになるんだろうなと思った。自分自身は、二度同じ俳優を吹き替えたことは三回あるが、その俳優たちの映画が続かず、ファイスクスはまだない。

「今日のマツソード、富田耕生さんが合いそうだね」

「わあ、ぴつたりですね。それ想像しながら、さつき見れば良かつた」

見た目や行動は粗野で乱暴だが心根は優しい中年男を、抜群に演じる先輩の名前を公生が挙げると、小巻はこくこくと頷いた。

小巻は公生から直接聞く吹き替えの現場や声優たちの話が楽しくて仕方がなかつた。しかし公生のほうは、小巻が20歳にして、例に出す映画もほとんど見ているし、その吹き替えの声優の名前もすべて知つていて驚いていた。

「どうしようか。この後、食事ならそのへんでお茶でもする？」

晴海通りを銀座四丁目の交差点まで来たところで、公生は小巻に聞いた。小巻は帽子を右手で抑えて、あたりのデパートの屋上にたなびくアドバルーンを見上げているところだつた。公生はその眩しそうな黒目がちな瞳と、丸顔のわりにはシャープなあごのラインに見とれてしまつた。

小巻は振り向いて微笑むと、また視線を上のほうに向けた。そして松坂屋デパートの屋上を見つめたまま言つた。

「あそこ、一緒に行つてください」

屋上の半分ほどのスペースは、たくさんの小さな子供たちの楽しそうな声で溢れていた。バスや新幹線が前後に揺れる乗り物、跨つて乗り線路を走る電車、区切られた中で自由に乗れる子供用自動車、日よけのついたまわりにはコインゲームが所狭しと並べられている。

公生と小巻は、そんな屋上遊園地の風景を見ながら、ベンチに座つてそれぞれコーラとオレンジジュースを飲んでいた。

「子供のころ、両親とデパートに来たとき、ここに来るのがいちばんの楽しみだつたんです」

小巻は両足を揃え、宙にぴんと伸ばして言つた。視線の先の、母親に抱っこされてパンダの乗り物に乗つて、まだ2歳くらいの女の子に自分を重ね合わせていた。

「松崎さんは、そんなことなかつたですか」

「なかつたも何も」

公生は思わず笑つて肩をすくめた。

「やっぱり都会つ子は違うなつて思つたところだよ」

「ご出身は？」

「茨城のすごい田舎のほう。デパートどころか、そもそも屋上がない」
公生のその言い方に、小巻も思わず吹き出してしまい、すぐには「ごめんなさい」と表情を変えた。公生は「いいんだよ」という顔で笑つた。

実際に公生の生まれ育つた町は、単線の駅のまわりにスーザーと呼ぶのものはばかれる商店がひとつ、あと店らしき店といえば、蕎麦屋と居酒屋くらいしかない。町の真ん中を突つ切る国道には、学校の前にだけとつてつけたようなガードレールがあり、通り沿いの公生の家は、トラックが通ると寝ていてる夜中でも揺れた。

「安東くんは、すごく都心なんだつて？」

「赤坂です」

「すごいな」

「いえ」

小巻はときどきそういう言われるが、そのたびになんと答えて良いのかがわからず困感する。確かに恵まれて育つたと思うが、それは両親のおかげだし、ひけらかすつもりはないが、謙遜するのもおかしい気がする。

父は食品輸入の会社を経営していて、母はアメリカ生まれの日系一世で、パンナムのスチュワーデスだった。母は結婚を機にパンナムを退社、小巻を産み育てたが、いつかはアメリカに戻るのが希望だった。そして小巻の外語大入学を機に、父は母の願いを叶え、日本本社は部下に任せ自分をアメリカ支社勤務とし、一人でロサンゼルスに移住した。

小巻は家族で暮らしていた赤坂のマンションに一人で住み、いまのところ大学卒業後は両親の元へ行く予定となつていて。しかし、もし叶うならやつてみたい仕事がある。

「今年、どの映画がお好きでした？」

小巻はオレンジジュースを一口飲んで、公生を見た。公生は「うーん」と記憶に残つてゐる映画を頭の中に並べた。

『カッコーの巣の上で』かな。安東くんは？

「私はもう、『狼たちの午後』です」

小巻の答えに、公生は思わず顔を覗き込んだ。

「なんか、女の子っぽくないというか」

「そんなことないですよ。あと、アル・パチーノがいちばん好きなんです」

「好みが男のだよ、それ」

「女の子が恋愛ものが好きっていうのは、偏見ですよ」

公生が呆れ顔を向けると、小巻はふくれつ面を作つて見せた。

「吹き替え、どなたになると 思います？」

『狼たちの午後』？ そりやあ、アル・パチーノは野沢那智さんで

決まりだけど

「ですよね。あのジョン・カザールとか、どなたがアテたら面白い

かなあつて、私、映画見た後にそんな想像するのが楽しいんです」

「それも、女の子としては相当変わつてるよ」

公生は肩をすくめながらも、小巻に微笑みかけた。

小巻はそこから、「あの方、ぴったりじゃないですか？」「松崎さんは、あの俳優さんに合いますよ」「私も、小さな役でも関わりたいなあ」と、いくつかの最近の映画を挙げては、理想の吹き替えキャストを嬉しそうに語つていった。やはりよく勉強してるし、何よりも本当に好きなんだろうということが伝わってきて、公生は次第に構えずに頬が緩んだままその話につきあつていた。

「ずっと、声優がしたかったの？」

ひとしきりのキャスティング会議の後で、公生は聞いた。すると小

巻は、少し困ったような顔をした。

「あの、このお仕事の先輩に、すごく失礼になつてしまふのですが、本当のことをお話してもよろしいでしょうか？」

「どうしたの改まって。いいよ、言つてみて」

「私、本当の夢は、海外に行くことなんです」

「海外？」

ずいぶん大雑把な話だと思いながらも、公生は小巻に続きを促した。「両親の影響もあるんですが、大人になつたらとにかく世界のあちこちに行ってみたいって、ずっと思つてたんです。そして、それがお仕事になればいいなって」

「世界のあちこち。なんだろう、スクワードとか？」

「母がまさに、パンナムのスクワードでした」

「すごい」

公生は感嘆の息を漏らした。いつも自分のアパートの部屋から、旅立つていくパンナムを見ているのは、それこそ公生のほうも子供のころからの憧れがあつたからだが、いまは小巻の話を聞くために口を挟むのはやめておいた。

「洋画が好きなのも、その吹き替えのお仕事をいただけて嬉しかった

のも、心のいちばん奥のところでは、世界中のいろんな国や街や人と、間接的にでも触れあえてるような気がしてるからなんです」

小巻はそこで一度、公生の様子を伺つた。芝居や吹き替えを、そんな理由でやるなど、怒られるかも思つたからだ。しかし、公生はふと空を見上げて言つた。

「俺も似たようなものかな」

「そうなんですか」

「大学で芝居に興味を持つて劇団に入つたんだけど、声の仕事の話が来たとき、なんだか別の嬉しさみたいなのを味わつたんだ。今まで言葉にならなかつたけど、いま安東くんが言つた、外国への憧れみたいなのに、少し近づけたからかもしれないな」

小巻は、松崎の訥々とした語りに、胸がきゅつとするほど嬉しくなつていた。

「となるとあれか。安東くんの目標は、兼高かおるかな」

「そうなんです！」

小巻は少し腰を浮かして、思わず公生の左腕に手をあてた。公生は突然の感触にどきつとしていたが、小巻は気にする様子はなくはしゃいでいた。

「まさに兼高かおるさん、私のいちばんの憧れです」

パンナムが提供の「兼高かおる世界の旅」が始まつて、おそらく20年近くが経つているだろう。今までこそ多少は海外旅行に行つたという話もまわりから聞こえるようになつたが、公生が中高生のころ、テレビに映る外国は憧れることすらできぬ、はてしなく遠い場所だつた。

ふと、小巻がタラップを上がつてパンナム機に搭乗する姿を想像してみた。それは、きっと海外の人々から見ても可愛らしく、かつファッショナブルに見えることだろう。ただの想像なのに、なぜか公生は日本人として誇らしい気持ちになつた。

いつまでも大きく手を振る小巻を見送つた後で、公生は三越の地下食品街でスペゲティソースなどを買って、本羽田のアパートに戻ると、午後7時すぎだつた。調子の悪いテレビで「アップダウンクイズ」を後ろにつけながら、スペゲティを茹で、温めるだけのソースをかけた。



7時半からはチャンネルを回して、食べながら「すばらしい世界旅行」を見た。「兼高かおる世界の旅」も好きだが、「すばらしい世界旅行」は久米明の独特的なナレーションが聞けるのが嬉しい。最近はよくお笑い番組でもモノマネをされているが、要はそれだけの、誰もがすぐわかる「声」だということだ。

長時間ついていると、テレビ画面の歪みは次第にひどくなつていった。ふだんならこの後はNHKの大河ドラマをつけておくが一度スイッチを切り、9時の日曜洋画劇場に間に合うように風呂に入った。今夜の作品は『荒野の決闘』だ。10年近く前に一度放映されているので、ヘンリー・フォンダはフィックスの小山田宗徳をはじめ、吹き替えのキャストも覚えている。それでも、先輩たちの豪華な共演は何度でも楽しみだつた。

風呂につかりながら、さつきまで一緒にいた小巻のことを思い浮かべた。それだけで顔がぽつと赤らんでしまう。公生は体を沈めて、湯のラインを鼻の下にして、その下でぶくぶくと空気を吐き出した。

もつと小巻といろんな話をしたかった。早くまた小巻に会いたい。悔しいがそれが本音だった。しかし、ぶくぶくと息を全部吐ききつたときに、公生はそんな小巻への思いに、もつと大きなものがあることに、自分で気がついた。それは、リリアーナを愛したエットーレ、リリアーナに恋い焦がれて憧れたアルマンドと同じ気持ちだつた。

僕は、もつと小巻の声を聞きたい。

公生は、もう吐く息がなくなつていて、ずいぶん経つてから気づき、どたばたと湯から体を起こし、げほげほ、ぜーぜーと慌てて呼吸を整えた。

見たこともない映画を吹き替える夢を見ていた。主人公は俳優の男と、パンナムのスチュワーデス。それぞれを演じているのも、見たことがないアメリカの俳優と女優。しかしながら機長の役はウォルター・マッソードだった。

アテレコスタジオで、主人公の2人を演じるのは公生と自分。2人は様々なすれ違いに翻弄されながらも、恋を成就させていく。ふと隣を向くと、台本を片手に公生がにつこりと微笑みかけた。

ふふふ。小巻は自分の笑い声で目を覚ました。自分でもちよつと



気持ち悪い声だったので、真っ赤になつて唇を噛み、そしてまたシーツをかぶつて笑つた。

小巻の部屋は角部屋で、東側と北側に窓がある。両方のカーテンを開け、寒いのは我慢しながらも北側の窓も開けた。目の前は赤坂御用地で遮るものはない。7階の高さから、真っ青な冬の青空が見えた。パジヤマの上にカーデイガンを羽織つて自分の部屋を出た。両親がない分、その広々としたリビングに、いまだに寂しさを味わう。

モスグリーンのシャギーカーペット、マレンコの焦げ茶色のソファ、イームスの黄色の椅子と白のリビングテーブル、アルコの大理石から伸びるステンレススチールのランプ。一方の壁には、父のウイスキーなどがそのまま残されたサイドボード、ヤマハの少し古いステレオセットとLPレコードのラック、これもヤマハのアップライトピアノ。小巻はまずご飯を炊き始めてから、シャワーを浴びて、味噌汁と納豆とししやもの朝食を取つた。先週は早起きをして羽田に行つたが、今日は家で台本をおさらいする時間くらいを考えて起きた。小巻は思つた時間に起きられるという特技を持つている。念のためにめざましはかけておくが、それを鳴らすことはない。

「愛のテーマ」が入つてゐる面にして、バリー・ホワイトのLPをかけた。台本を覚えたり、勉強のときでも、歌はさすがに気が散るが、インストゥルメンタルのレコードは集中力が上がるような気がする。小巻は、黒のキュロットスカートにオレンジ色のクルーネックカーディガンに着替え、今日はこれに鮮やかな青のベレー帽と茶色のコインローファーを合わせようと考へてから、ソファに座つて台本を開いた。先週に続いて、今日の水曜洋画シアターでも役をもらえた。先週は主演だったが、今回ヒロインは清村恵美で、小巻はその友人役だ。それでも光栄だし嬉しい。そして、台本にもう一度目を落とす。そこには三番手の役に「松崎公生」とクレジットされている。

一週間前に初めて会えて、次の日は銀座で偶然出会えた。あれから、公生のことばかり考へてゐるような気がする。目の前で話ができたときには、小巻は密かに望みをひとつ叶えていた。

松崎さん、やっぱり素敵なお声だつたな。

くふふふ。また、おかしな笑い方をしてしまい、小巻はぐつとそれを抑えて背筋を伸ばすと、自分の出番のページを開いた。



番町スタジオへは、小巻の家からはアクセスが悪い。番町に近い麹町に二年前に駅ができたが、半蔵門線の延長計画はまだ先らしく、小巻は赤坂駅から千代田線、国會議事堂駅で乗り換えて丸ノ内線で四谷で降り、そこから一五分ほど歩いてスタジオに入った。

「おはよ、こまちやん」

早く来たつもりだったが、すでに先にいた恵美が手を振った。

「恵美さん、おはようございます。お早いですね」

「だって、今日の台詞多いんだもん」

恵美は台本を手にむすつとした顔を作つてみせた。もちろんその顔は冗談だが、確かに最初から最後まで喋りっぱなしの役だ。

殺人事件の現場を目撃してしまった女。彼女は警察に届けるが、それでも何者かにつけ回されるようになる。担当の刑事は彼女を保護するふりをしながら、彼女をエサに犯人を捕まえようとする。このヒロインは美人だが気性が荒く、そんな刑事に罵詈雑言を浴びせ続けるのだ。

恵美はこういった、美人だが攻撃的、あるいは魔性の女やはすっぱな女を得意としている。小巻はそんなヒロインが部屋に転がり込んでくる女友達の役で、公生はヒロインをつけ回す謎の男の役だ。

他のスタッフや声優たちが集まり始め、集合時間の一五分前に公生はスタジオ入りした。

「松崎さん！」

「ああ、安東くん」

「おはようございます」

「うん、おはよう」

恵美たちが声をかける前に、小巻が弾けるような挨拶をして、公生もまんざらでもなさそうにそれに応えた。恵美はその様子に、少し驚いた顔を向けた。先週の明らかに機嫌悪そうに接していた公生でも、遠回しに説教をされていた小巻でもないから当然だった。他のメンバ一は前回はおらず、八重樫と疋田は副調整室で打ち合わせ中だった。刑事役を演じるベテラン、道家敬次がスタジオ入りってきて、全員が立ち上がって頭を下げた。

「ハムも恵美も、ずいぶん久しぶりだね。半年？ 1年？」

「ごぶさたしております」

本当は3か月ぶりだが、公生は指摘せずに挨拶した。したし恵美は腰に手をあてて口を尖らせた。

「敬次さんひどい。先月、浜町スタジオで一緒に締めたじゃないですか」「だつたかな。それだけ、可愛い恵美に会えない時間が寂しかつたつてことだよ」

「じゃあ、許します」

恵美はふつと吹き出した。道家は小巻に目を向けた。

「で、こつちにも可愛い子が。君が、小巻ちゃん?」

「はい。はじめまして、安東小巻です。今日はよろしくお願ひいたします」

「はいはい、こちらこそ」

そこで道家は小巻を見つめたまま公生に聞いた。

「ハム、先週一緒だつたんだろ。どう、こちらの新人さん」

「どう?」

「ごめんね、俺、まだ小巻ちゃんのアテたの、見てなくてね。ハムから見てどうたつた?」

道家は最初は小巻に、途中から公生に対して言つた。小巻は緊張して、人には気づかれないくらいに唇をきゅつと噛んだ。公生には先週、ずいぶん叱られた。しかしその翌日は、打つて変わつて優しく話をしてくれた。いま、先輩に向かつてどう自分を評価するのだろう。

「新人ですからドレスやタイミングは多少あれでしたけど、最終的には良かつたですよ。なあ?」

公生はそう言うと、恵美に同意を求めた。すると恵美は首を横に振つた。

「私は最初から、こまちやん上手だつて言つてたわよ」

「そう、だつけ」

「そう。文句言つてたのは、ハムさんだけ」

「いや、それは文句と言うか、違うよ、アドバイスつて言うか」

恵美に強く言われ、公生はたじたじになりつつあつた。すると小巻が、につこりと二人に笑いかけた。

「はい、いただいたアドバイスで頑張れました。まだまだだつたかもしませんが、松崎さんと恵美さんのおかげです」

小巻のまっすぐな言葉に、公生はますます返す言葉を失い、恵美は「ありがと」と口の動きだけで小巻に伝えた。

「なんか、聞いてた話と違うなあ」

すると道家がのんびりした口調で言つた。皆が道家にその意味を聞

「だつて、ハムがまた、若い女優泣かせたつて、業界中で噂だつたよ」

「こうと顔を向けた。

「泣かせてなんか、それにまたつて、え、噂ですか？」

公生は慌しどろもどろになつた。隣で小巻も「そんなことないですよ」というように、顔の前で手を振つた。恵美は口を抑えて笑いを堪えた。

「誰ですか、そんな噂を道さんまで広めてるの」

「それは、情報提供者の権利のために言えない」

道家は、まさに今日の映画の台詞をそのまま役の口調で言つた。そしてにやりと笑つた。

「道さん、ハムつたらまた若い子いじめる悪い癖、ひどいの、わたくし信じられない、って言いにきた奴がいたなんて教えられないな」

スタジオ中の誰もが不二夫の顔を思い浮かべ、公生は大きくうなだれて、他の皆は大笑いした。

収録が終わり、駐車場へ向かう通路で、道家が公生の肩を揉みながら言つた。

「ハム、さつき見たけど、まだあのスバル乗つてたのか」

「はい」

「もういいがげん、ポンコツだろ」

「そんなことないですよ。ちゃんと走りますよ」

「部屋も変わらず？」

「羽田です」

「え」

二人の会話に、その後ろの小巻が思わず声をあげた。公生と道家は同時に振り向いた。小巻は自分の大声に照れつつも、公生の目を見つめた。

「私、羽田空港に行くのが趣味なんです」

「趣味？」

「趣味つて、変ですね。あの、羽田に行つて、デッキで飛行機を見るのが好きなんです」

公生は、小巻は母がパンナムのスチュワーデスで、海外に憧れているという話を聞いていたので、その話は自然と納得できた。しかし道家はおかしそうに小巻の顔を覗き込んだ。

「変な趣味」

「です、よねえ」

「冗談冗談。いいじやない、お気に入りはどこ？ ダグラス？ ボー

イング?」

「パンナムの、ボーアイング707がいちばん好きです」

「わかつてゐねえ。僕も747より707のほうがかっこいいと思つ

よ」

「ですよね!」

小巻はびよんと飛び上がって手を叩いた。道家は笑みを浮かべて公生に言つた。

「やつぱりこの子、変わりもんだね」

「だと思ひます」

「そんな、ひどいです」

小巻は公生と道家にふくれつ面を向けた。

道家がジャガーに乗つて帰るのを見送つてから、公生は言つた。

「でも、僕が本羽田に住んでるのは、安東くんの理由に近いよ」

「そうなんですか?」

「子供のころにさ、親戚のおばさんがハワイ土産でマカデミアナッツチヨコレートをくれたんだ。それも嬉しかつたんだけど、その袋にパンナムの宣伝用パンフレットが入つててね。もう朝から晩までそれを眺めてた。飛行機の近くに住みたいて、そのころから思つてたんだろうな。すつかり忘れてたけど、安東くんに会つてそんなことを思い出したよ」

公生の言葉に、小巻は嬉しそうに頷いた。そして首を傾げて言つた。

「ねえ松崎さん、一緒に、羽田空港に行きましょう」



近くに住んでいながら、公生は羽田空港自体にはほとんど來たことがなかつた。

そもそも公生のアパートの近くに京浜急行の羽田空港駅があるが、これは名ばかりで、実際の空港はその駅から埋め立て地への水路と環状八号線のはるか向こうだ。いざ空港に行くにはとても不便な場所だった。

なので公生はその日、徒歩ではなくスバルで空港へ入つた。

1976年12月23日。この日は公生の30歳の誕生日だつた。

階段を上つて見学デッキへ出ると、エプロンには日航機と全日空機、そしてルフトハンザ機が停まつてゐるのが見えた。思つた以上に間近

で、けつこうな迫力があった。

平日の昼過ぎだがたくさんの見物客がいた。しかし、その中で小巻を見つけるのは簡単だった。髪は黄色のリボンでツインテールにしている。細身の白のスキニーパンツの裾をブーツに忍ばせ、白のセーターの上に、襟と袖にボリュームのあるファーを施したジャケットをウエストベルトで絞っている。その颯爽とした姿に、男だけでなく女も何人かが振り返っていた。

小巻もすぐに公生に気づき、ぱつと笑顔になつて手を振った。公生も思わず、その笑顔に頬が緩んだ。

「土曜の夜は羽田に来るの」

なんだか普通の挨拶をするのが照れ臭くて、公生は小巻の前に来るなり言つた。

「今日、木曜ですよ？」

「いや、そういう歌があるんだ。知らない？」

「知らないです。誰ですか？」

「ハイ・ファイ・セット」

昨年出たシングルのB面なので知らなくても当然だった。公生もラジオコマーシャルの録音で、西新宿の高層ビルにあるFM東京に行つたときに、たまたま流れているのを聞いて覚えていた。旅が好きだった男の面影を探し、羽田に来る女の歌だ。さらつと聞くと、別れた男への未練のようにも思えるが、じつくり聞くと旅先で亡くなつた恋人を想う歌にも聞こえてくる。

小巻にせがまれて、公生はあまりうまくないが小声で覚えている範囲を歌つてみせた。すると小巻は小さくぱちぱちと拍手をした後で、物思いに耽るような顔つきになつた。

「せつないなあ。でもわかるなあ」

「アメリカに恋人が帰つちやつたことがあるとか」

公生はなんでもないように言つた。すると小巻は目を丸くした。

「なんで松崎さんつて、なんでもわかるんですか」

「え」

「え？」

公生のほうは、「そんな恋人いないですよ」と笑わせるために言つた冗談のつもりだつた。しかし、まさかの正解で、驚いているのは小巻よりも公生だつた。小巻にかつて恋人がいたことも、よく考えれば不思議なことではないが、改めて知るとショックだつたことは間違いなかつた。しかもその相手がアメリカ人となると、公生はやはり小巻

は育ってきた環境から違うんだよなと、嫉妬以上に諦観のようなものまで感じてしまった。

小巻は公生の戸惑いの意味がわからず、その顔をじっと見つめていた。公生は「なんでもないよ」という顔を作つて、小巻と一緒に欄干にもたれて滑走路のほうへ目をやつた。

ハイライトに火をつけると、小巻が「ほらほら」と空の彼方を指さした。

公生が目を向けると、そこに小さなきらりとした光が見え、それはすぐに飛行機の形となつて近づいてきた。やがて緑色のロゴと尾翼が見えて、キヤセイ・パシフィック航空のロッキード・トライスターだとわかつた。斜めに降りてきた機体は、空港中にブレーキとジェットエンジンの音を響かせて滑走路に滑り込んだ。遠足なのか小学生たちの団体から歓声が上がつた。

「着き心地、さわやか。キヤセイ・パシフィック」

「広川太一郎さん」

公生がふと、コマーシャルのキヤツチコピーを読み上げると、小巻はそのナレーションを語る名声優の名前を嬉しそうに口にした。「愛のテーマ」が流れるそのCMは、ともに大のお気に入りであることは、まだ互いに言つてはいなかつた。

「お父さんと同じ匂い」

キヤセイ機がエプロンのほうへ旋回してくるのを見つめたまま、小巻は呟くように言つた。公生が顔を向けると、小巻は公生の口元に目をやつた。

「ハイライト。お父さんも同じのを吸つてました」

「意外だな」

「なぜですか」

「いや、安東くんのお父さんだったら、マルボロとかキヤメルとか、洋モクを吸うだらうつていま勝手に思つちやつてね」

どんな人なのはわからないうが、少なくとも海外経験が多いブルジョワが、こんな庶民的な煙草を吸うのがなんとなく想像できなかつた。

「1本、いただけますか」

「吸うの?」

公生はパッケージを振つて1本飛び出させて、小巻に向けた。小巻はそれをくわえ、公生がつけたジッポに顔を近づけた。そしてハイライトの先に火がつくなり、げほげほとむせた。

「大丈夫?」

公生は小巻からハイライトを半ば奪うように取り上げながら言つた。本当は背中をさすつてあげたかったが、それはあまりに馴れ馴れしいような気がして我慢した。

小巻はひとしきり咳き込むと、目に少し涙を浮かべながら「ごめんなさい」という顔をして笑つた。

「ブリジット・バルドー・アンナ・カリーナって、本当にかつこよく吸うじやないですか。ずっと憧れてるんですけど、どうしても吸い込めないんです。子供、ですよね」

小巻はバッグからハンカチを取り出し、目尻の涙をすつと拭つた。公生は火のついた煙草を2本持つていてもしようがないので、小巻にあげたものを地面に落として、靴のかかとで消した。しかし消すときには、フィルターに小巻の口紅がついているのが、なぜかとてももつたいたなく思えた。

「松崎さん、昨日四ツ木さんと一緒に緒したんです」

「さぞうるさい現場だつたろうね」

公生は不二夫の顔を思い浮かべる仕草をして、肩をすくめた。

「とつても楽しかったですよ。でもすごいですよね。昨日は2枚目の物静かな役だつたんですけど、ふだんと全然違うのに、もうその声にしか聞こえませんでした」

様々な役を演じる声優は多いが、不二夫はとくにその守備範囲の広さが持ち味のひとつだった。爽やかな好青年も、はしゃぐ少年も、ときにはロボットの機械音まで担当することがある。

「そうそう、それで四ツ木さん、松崎さんが吹き替えの台本をすごくいっぱい持つていらっしやるつて教えてくださいたんです」

「自分が出たのはもちろんだけど、スタジオに置きつ放しにしてあるのとか、片つ端から集めてた時期があつてね。さすがにもう棚がパンパンでやめてるけど」

「ああ、何か読んでみたいなあ」「好きだったの、ある?」

「そうだなあ。『オーシャンと十一人の仲間』は?」「やっぱり安東くんの趣味は渋すぎるよ」

公生は思わず笑つた。

「持つてるよ、シナトラは家弓家正さん、ディーン・マーチンは羽佐間道夫さん、サミー・デイビス・ジュニアは内海賢二さん」

「読んでみたいなあ。あ、じやあ女の子っぽいこともちやんと言います。たとえば『男と女』って好きなんんですけど、去年、月曜ロードシ

ヨーでやりましたよね？ 私、見られなかつたですよ

「持つてるよ。西沢利明さんと小沢寿美恵さん」

「ああいう、台詞の少ない映画つて、逆にすごく気になります」

「じやあ今度、持つて来ようか」

公生は何気なく言った。言いながら、これが次に小巻に会うきつかけになればいいなと思つて、自分に気づいていた。

「本当ですか。嬉しい。あ、じやあ松崎さん、ジヤン・ルイ・トランティニヤンとアヌーク・エーメで練習させてください」

「練習？」

「実際の台詞、お芝居でしてみたいです」

「それはさすがにやつたことなかつたな。面白そうだね」

「わあい」

小巻は子供のような笑顔になつた。そしてさらに、何かに気づいたようではぱつと顔を輝かせると、公生の腕を両手でぎゅつと握つた。公生はその小さく柔らかい手の感触に、ぞくぞくと腰のあたりに痺れが走つた。小巻は腕をつかんだまま、空を見上げた。

「来ました、パンナムですよ」

(つづく)